

日本国際文化学会

<http://www.jsics.org>

ニューズレター

2008年2月15日 発行
日本国際文化学会事務局

〒102-8160

東京都千代田区富士見2-17-1
法政大学国際文化学部
熊田泰章研究室

2008年7月12日(土)、13日(日)の両日、第7回大会が神奈川県茅ヶ崎市の文教大学湘南キャンパスで開催されます。共通論題など、おおよそのプログラム概略が決まりましたので、お知らせいたします。同時に、自由論題発表者を募集しております(3月末日締切)。自由論題を含む詳細なプログラムは、次号をお待ちください。

日本国際文化学会 2008年度 第7回全国大会(文教大学) 自由論題発表者募集

以下の要領で自由論題発表者を募集いたします。ご指導の大学院生にもお勧めください。

- 1) 発表内容: 国際文化の発展に寄与するもの
- 2) 発表時間: 一人30分(質疑応答も含む)
- 3) 応募資格:

日本国際文化学会の会員。ただし、現在会員でない方でも、第7回全国大会までに会員登録をいただければ、資格を得ることができます。

(会費につきましては、新年度会員として登録されます)

入会手続きは、インターネットで可能です。[http://www.jsics.org/](http://www.jsics.org)

- 4) 応募要領:

氏名・所属・発表題目・キーワード(3~5語)を明記し、発表要旨(40字*25行以下)を付けて、電子メールまたは郵送にて、次のアドレス宛にお送り下さい。

- 5) 申し込み先

〒253-8550 神奈川県茅ヶ崎市行谷1100 文教大学国際学部 若林一平研究室
日本国際文化学会第7回全国大会実行委員会事務局
電子メール: ippe@shonan.bunkyo.ac.jp

- 6) 応募申し込み期限: 3月31日必着

日本国際文化学会第7回全国大会 ご案内

日時: 2008年7月12日(土) 午前9時 - 午後8時
(懇親会あります)

2008年7月13日(日) 午前9時 - 午後4時

会場: 文教大学湘南校舎 〒253-8550

神奈川県茅ヶ崎市行谷1100 文教大学
実行委員会事務局 国際学部若林研究室
電話 0467-53-2111(代表)

*参加費 一般会員 2,000円 学生会員 1,000円
懇親会費 一般会員 5,000円 学生会員 2,000円

シンポジウム: 文化の戦略性をめぐって

このシンポジウムにおいては、文化の戦略性が問われる時代にあって、各分野で活躍される方々にお

集まりいただき、それぞれの取り組みについてお話をうかがい、問題の所在を探り、解決のための手がかりについて話し合います。

共通論題 次の5つの論題を予定

- (1) 異化/聖化の<文化免疫学> - 排除されたものの方から文化の主体を探る
- (2) 高齢社会日本における在日外国人の活用 - フィリピン人のホームヘルパーのケース
- (3) 中間系の諸問題 - 東南アジアにおけるマジョリティーのエスニシティ
- (4) 東アジア地域意識の展開と変容
- (5) 文化表象としての世界遺産の<世界性>と<ローカル性>

2007 年度秋季研究発表会について

日本国際文化学会会長 熊田泰章

2007 年度には、7 月の第 6 回全国大会に加えて、9 月に秋季研究発表会を開催いたしました。これは、会員の皆様にはすでにご承知のことではありませんが、第 6 回全国大会において、台風の襲来による交通機関の乱れが原因となって一部の発表が実施できなかった事態への対処として、行なったものです。7 月の第 6 回全国大会をそのような条件下で開催することを補うものとして、秋季研究発表会開催を決定いたしました。その決定からわずかに 2 ヶ月の準備期間しか設けることができない日程の制約がありましたが、関係する会員の皆様のご協力によって、秋季研究発表会もまた成功させることができました。

第 6 回全国大会の発表申し込みを行なった際に、すでに明らかであったように、大学院生の会員の方々が発表しようとする意欲旺盛であるのがことに本年は目立つのですが、第 6 回全国大会当日においても、交通混乱を乗り越えて、続々と若い院生の方々が到着してくるところを見る時に、それをまた強く感じました。もちろん、日本全国の様々な組織で国際文化学に取り組む約 400 人の会員の方々は、

それぞれの所属組織が、大部分、設立時の業務繁忙期を経て、研究業績を積み上げることに集中すべき段階に達していることも忘れてはならないことでしょう。そのような中で、全国大会は、研究発表の場としてその重要度がいや増すばかりであると感じています。

秋季研究発表会を開催することを決定するに当たっては、2007 年度の発表の場を確保することと学会誌『インターカルチュラル』への論文投稿を可能とすることを、日程上、配慮することにいたしました。そのために、第 6 回全国大会を台風の影響下で開催決定すると共に、秋季研究発表会の会場校と日程の決定を非常に短時日の内に行ないましたが、早稲田大学に引き受けていただくことで、それが可能となったことは、まことにありがたいことでした。

わずかな準備期間ではありましたが、会場の用意も適切に整えられ、発表の方々、参加の方々も、急に割り込むこととなった秋季大会に駆けつけてくださり、2007 年度の 2 回にわたる全国大会は共に充実したものになりました。関係された皆様のご努力に敬服し、感謝申し上げます。

2007 年秋季臨時大会風景(会場：早稲田大学)



研究会を開きませんか - 研究会のサポートを広げます -

日本国際文化学会は、これまで、会員の方々がそれぞれに開催する研究会をサポートするために、1 万円を限度とする補助を行ない、また、可能な場合には、葉書または電子メールによるお知らせを出すと共に、ニューズレターにも開催のお知らせや実施報告を掲載してきました。これは、地方支部をまだ設けていないことに鑑み、地方支部活動に代わるものとして、会員の方々が関係する研究会をサポートするという方針によるものです。2007 年度学会事業計画とその予算にも、この方針を反映させています。

については、このサポートをもう少し進めることとし、上記に加えて、できるだけ多くの研究会開催のお知らせを、可能な限り、学会ホームページにも掲載することにいたします。会員の方々が関係する様々な研究会の開催について、学会事務局に前もって情報提供していただき、それをその都度ホームページに掲載します。この場合、その研究会が国際文化学とつながりがあり、参加公開であることのみを条件とします。上記の経費補助は、学会予算の範囲で、常任理事会承認後に行ないます。ホームページへの掲載は可及的速やかに行ないます。

ホームページ(<http://www.jsics.org>)に掲載の研究会補助申請書式用いて、以下の事項を記載の上、学会事務局にご連絡ください。

〔研究会の名前・テーマ、表題など・日時・場所・発表者・主催者・主催者連絡先・情報提供者氏名と連絡先〕

また、研究会実施報告をニューズレター、あるいは、学会誌『インターカルチュラル』に掲載することも、更に積極的に推進していくことにいたします。会員の皆様からの多くの情報提供を期待しております。

「現代リベラル・アーツとしての国際文化学、5つの条件」

早稲田大学政治経済学術院 平野健一郎

「国際文化学」は現代のリベラル・アーツの学問として要請されており、そういう学問分野として成立しつつある。「国際」を、文化をてがかりにして理解するのが「国際文化学」である（「国際文化」があるという前提に立った「学」ではない、ということ）。「国際」社会は200ほどの国家に分かれていると考え、「国際」とは、その国家と国家の「間」（際）のことでありと考えることも可能である。しかし、「国際」という全体はそれ以外の分かれ方もしているのではないだろうか。国境という境界で区切られた空間とは違う空間が多数集まって、「国際」という全体が出来ていると考えることも可能ではないだろうか。（この場合の全体を「国際」と形容するのは適当ではないが、今のところ、もっと適当なことはがない。）

近代という時代は「国民国家」の時代であった。すべての人々がそれぞれの「国民国家」を持つことがテーゼとなり、実際に、内実のさまざまな問題に目をつむれば、地球が初めて隙間なく「国家」空間で埋め尽くされる結果となった。しかし、「国際」という全体を国家空間の総和とだけ考える習性に囚われていては、近代の拘束から抜け出して、歴史を前進させることはできないのではないだろうか。そこで、「国際」という全体の部分空間を別のものとして捉えようとするれば、国家の代わりに「社会」を置くのが一つの方法であろう。そうすれば、無数の社会空間が「国際」という全体を構成する部分として存在することになる。もう一つの方法がその空間を「文化」空間と捉える方法である。無数の文化空間が存在して「国際」という全体を構成し、相互関係を織り成すと考えるのである。文化は人々を集団・社会にまとめる力を有するから、社会以上の汎用性を持つ。かくて、国際文化学への要請が生まれる。

「国際文化学」が現代のリベラル・アーツの学問として発展していくためには、いくつかの条件があるであろう。その基礎的な条件として、ここでは、次の5つを挙げたい。

1. 文化を多面的、重層的なものとして捉えること

文化をそのように重要な基本要素として使うには、どのような注意が必要であろうか。まず、文化は広大、深遠で、それゆえ曖昧で、捉えにくい。文化を「国際」全体の基本構成単位と見なす、という重大な転換を行ったあとでは、文化を、厳密な研究教育の立場からクリアーに使えるようにしなければならぬであろう。「文化」を厳格に定義する方向には、大きく二つあると考えられる。一つは、すべての場合を包括する抽象的な定義を与える方向である。もう一つは、一つひとつの文化を具体的に、しかも包括的に捉えようとする方向である。文化は人々を一つひとつの集団にまとめるものであるが、同時に、人々が個別具体的な環境の中で、それによっ

て暮らしを立てるものであるから、簡単にひとまとめにすることはできない。一つひとつの文化は個別的存在であるから、「国際」全体としてはきわめて多様な、ほとんど無数といってもよい文化が存在する。と同時に、一つひとつの文化が多面的である。無数の文化を多様性と多面性の観点で捉えることが必要である。

加えて、「国家」空間を「文化」空間に置き換えて、「国際」全体を理解しようとするならば、「文化」空間を「国家」空間の存在するレベルにのみ指定する必要はなく、そうしてはならないであろう。実際、国民国家時代でも、人々は国民文化だけで暮らし、まとまっていたわけではなかった。現代では、なおいっそう、ナショナル・レベルの上と下、多数の次元に文化が存在すると考えるべきである。一人の人が生きる文化は、その人を囲んで、複数の次元で重層しており、そのどれもがその人の生活・生存に関係し、「国際」全体にも関わると考える必要がある。「国際的に」文化を捉えるということは、第一に、多様性、多面性とならんで、重層性で文化を捉えるということである。

2. 文化を変化と不変の両面で捉えること

複数の次元上に「文化」空間を指定することになると、一定の空間と特定の文化を結びつけることになるから、それぞれの文化を固定的に捉えることになりやすい。日本という空間には「日本文化」という文化があり、その特徴はかくかくしかじか、という話法は、しかし、一般の人々だけでなく、文化論の専門家も陥りやすい、誤りである。文化は人々の生活そのものだといってもよいものであるから、変化するものだということが大原則である。しかし同時に、文化は、それによって人々が集団を作り、アイデンティティの拠り所にするものでもあるから、文化には連続性があり、不変であるという面もある。変化と不変という相反する性格を持つものとして文化を捉える必要がある。国際的な視野で考える場合には、「国際」の場で文化と文化の関係が絶えず発生するのであるから、とりわけこの捉え方が重要であろう。

3. 自己と他者の関係に敏感になり、あくまでも相互理解を迫ること

第三に、国際的な文化関係においては、自己と他者という捉え方が絶えず必要である。生活の空間においては、複数の異なる文化が変化と不変の両面を見せながら接触を続け、変化し続けるのであるから、いわゆる「多文化共生」と相互理解は必須である。異質の共存に耐えなければならぬ。同様に、研究においても、自己と他者を分別することが出発点であろう。しかし、区別が必要であるからといって、自己の文化を善しとし、他者の文化を貶めるよ

うなことはそもそも文化の本質に反することである。さらには、自己と他者の区分が永遠に存続すると考えるべきかどうか、を考えるのも国際文化学研究者の課題であろう。

4. 文化の境界にこだわること

だが、自己と他者はどのように区分されるのか。すなわち、文化は境界性を持つのか持たないのか。「国家」空間は国境によって明確に区切られているが、文化に境界線はない、と思われる。しかるに、われわれは「日本文化」といい、「沖縄文化」という。文化にも境界線があると想定している。「国際」という全体の中での文化と文化の関係を考察する以上、それぞれの文化は境界を持つと想定せざるをえない。しかし、現実の文化に境界線を探しても、それは逃げ水のように捉まえることができない。このパラドックスは重要なポイントであり、私には非常に気がかりなポイントでもある。具体的な一つひとつの文化を捉える場合はもちろん、理論的にも「文化の境界」という問題にこだわる必要がある。

5. 文化の個別性と普遍性に注目すること

最後に、個別性と普遍性の双方で文化を考えることが必要である。「文化の境界」という問題点も、ひとまずは、文化を個別に考察する場合の問題点であるが、結局は、文化の全体的理解に関わる。個々の文化には個別性、独自性、特異性があり、要するに、文化は多様である。しかし、その中でも文化間の共通性は少なくない。人々が生きるために必要とし、生み出し、育ててきたのが文化である以上、多少の環境の違いを越えて、文化間に共通点が多いのは当然であろう。しかし、文化には、そうした共通性をも越える、深い普遍性があるのではないだろうか。人が生のために文化を必要とすること、多様で多面的な文化を必要とすること、これこそが文化の普遍性であるともいえよう。こうした思索的な模索も、インターナショナルからトランスナショナル、さらにはグローバルへと展開する「国際」という全体の中で、国際関係を文化で考えるために必要な文化の捉え方であるように思う。

付. 学問の方法は厳密に

文化の研究においては、変化と不変、自己と他者、境界の有無、個別性と普遍性のほかにも、いくつか二項対立的な柱を立てることができるであろう

が、それらを二律背反としてではなく、「両にらみ」で考え、そして「使う」のが、国際文化学の学問的性格ではないだろうか。それ故に国際文化学は面白いのだ、といえよう。また、それ故に、他の、方法論が確立した学問領域の人々からは、曖昧模糊として頼りないと思われるのであろう。しかし、現代の人々が「国際」という全体の中で生きる以上、その全体と、その隅々の細部までとを深く、正確に理解する、人間的な努力を続けなければならないのではないだろうか。

前近代から近代へ、近代化からグローバル化へと、文化が不変でありながら変化するという歴史が世界中どこにでもある。そこから国際文化学を展開していこうとすれば、無数のテーマがある。国際文化学は非常に多くの可能性に富んだ新しい学問領域であるが、その面白さだけに頼ってしまっただけでは、「何をやっているのか」と他領域の人々から言われるに違いない。国際文化学が学問であり、科学であるためには、われわれはやはり厳密な方法をいっそう それこそ、人一倍に意識しなければならないであろう。地味で着実な実証と論証を重ねて、人々が関心を持つ問題を解明していく、そして、さらに面白さを増していくことが求められる。(その意味で、具体的には、学会誌『インターカルチュラル』における投稿論文の査読は非常に厳しいものでなければならない。研ぎ澄まされた問題意識・分析・論証、明晰な文章による充実した内容の投稿、論争的な投稿を待つこと切なるものがある。)

大小さまざまな問題に徹底的にこだわることによって、人の生の真実に迫って行きたい。

(編集者付記：昨年 1 月に名桜大学で行われたシンポジウム「学問としての国際文化学」の報告者の一人平野健一郎先生に原稿執筆をお願いしました。当シンポジウムの記録は、『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』10号(2008年刊)に、松井賢一研究代表「国際文化学の確立 - シンポジウムと考察」として掲載されますが、このテーマは、当学会員にとって、きわめて関心の高いものと思われます。今回、平野先生は昨年の報告を踏まえつつ、再考の上、大きく改稿されています。)

役員選挙についてのお知らせ

2008 年度に、規約により役員選挙を行います。選挙方法は、これまでの方式通りといたします。常任理事会で定めた日程(予定)は、以下の通りです。

日程： 3月31日会員資格確認、4月15日投票用紙郵送、4月30日投票締切、5月10日開票。

選挙は、選挙管理委員会によって実施します。

(編集責任者：神戸大学国際文化学研究所 木下資一)